

千葉大学文学部主催

〈ニキータ・アレクセーエフ 岸辺の夜〉展

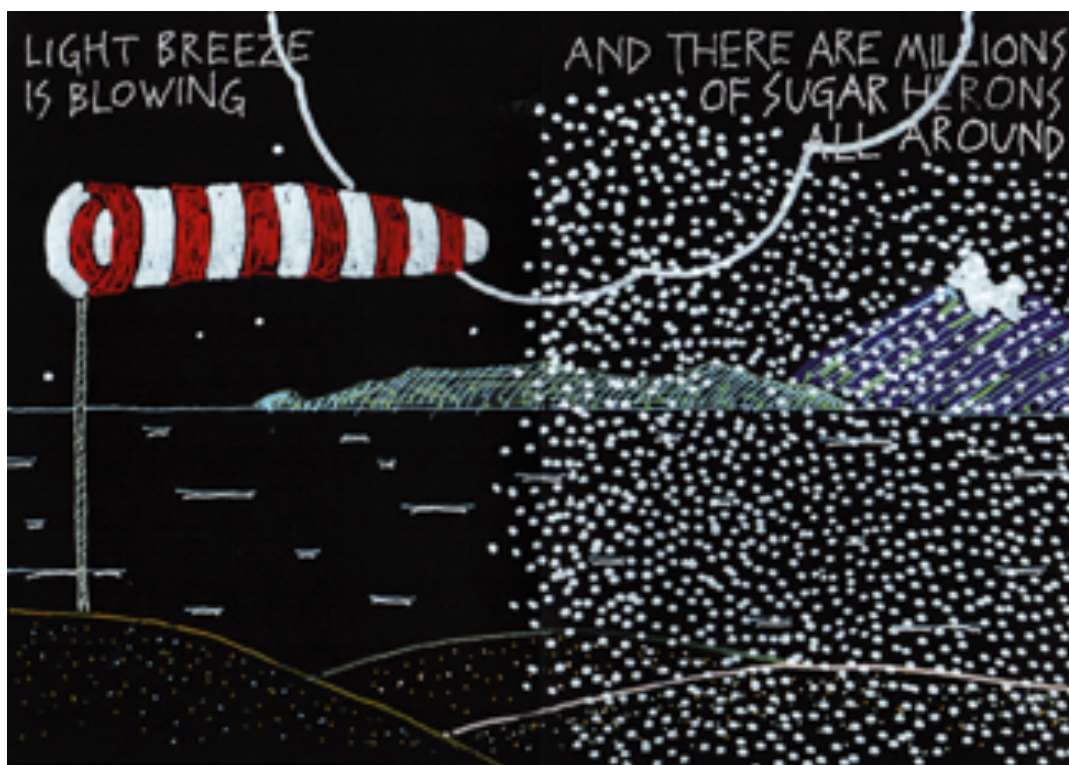
【展覧会概要】

ロシア現代美術を代表するアーティスト、ニキータ・アレクセーエフの日本初の個展を、千葉大学附属図書館で開催します。

本展覧会のために新たに制作したドローイングの展覧会です。

日本文化の深い愛好者として知られるアレクセーエフが、宮沢賢治の『銀河鉄道之夜』をはじめ、信州の「帚木」の伝承、『源氏物語』などの日本の古典文学、多和田葉子の小説、そして世界の様々な文学や文化からインスピレーションを受けて制作した作品で、巻物、屏風絵などで構成されています。

展覧会の準備や運営、資料の翻訳などは、千葉大学文学部の「スラヴ文化論演習」とロシア語の授業の受講生が中心になって行い、期間中、学生が展覧会の解説も行ないます。



2017年6月8日（木）～6月28日（水） 10:30-18:00 （入場無料）

* ただし6/8は12時半から、6/28は13時まで。

オープニング 6/8（木）12:30～14:30 （予約不要）

オープニングの最初に作家による挨拶と作品解説があります。

作家、ギャラリー・イラギ主宰 Ekaterina Irague 氏との懇談の時間もございます。奮ってご参加ください。

場所：千葉大学附属図書館本館/アカデミック・リンク・センター

N棟1階ブックツリー

千葉市稲毛区弥生町1-22 (千葉大学西千葉キャンパス)

- ・JR西千葉駅より西千葉キャンパス南門まで徒歩約2分
- ・京成みどり台駅より西千葉キャンパス正門まで徒歩約7分
- ・千葉都市モノレール天台駅より北門まで徒歩約10分

西千葉キャンパスマップ http://www.chiba-u.ac.jp/campus_map/nishichiba/index.html

主催：千葉大学文学部

共催：Galerie Iragui (モスクワ)

*本展は、科学研究費基盤研究(C)「現代ロシア文化における文学と視覚芸術の相互的影響の解明」の助成を得ています。



【関連イベント】

6/14 (水) 13:00-14:00

公開レクチャー「ニキータ・アレクセーエフの芸術とロシア現代芸術」

講師：鴻野わか菜 (千葉大学・人文科学研究院・准教授)

6/20 (火) 12:10-12:40

あかりんアワー「南極で美術は可能か？ 第1回南極ビエンナーレに参加して」(公開)

講師：鴻野わか菜 (千葉大学・人文科学研究院・准教授)

(千葉大学アカデミック・リンク・センター主催)

6/21 (水) 12:50-14:15

公開レクチャー「協働で生まれる景色 ～南極から瀬戸内まで、所作のコミュニケーション～」

講師：五十嵐靖晃 (作家)

現代アーティストの五十嵐靖晃氏をお招きし、6～7月に開催される北アルプス国際芸術祭での新作や、南極ビエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、TURN などでのプロジェクトについて、お話をお伺いいたします。

五十嵐靖晃

1978年 千葉県生まれ、在住。人々との協働を通じて新たな景色を作り上げるようなプロジェクトを世界各地で展開している。

2017年：「南極ビエンナーレ」（南極）、「北アルプス国際芸術祭」（長野）

2016年：「TURN フェス」（東京）「TURN in BRAZIL」（ブラジル）

2013、2016年：「瀬戸内国際芸術祭」（香川）

2013～2016年：「赤崎水曜日郵便局」（熊本）

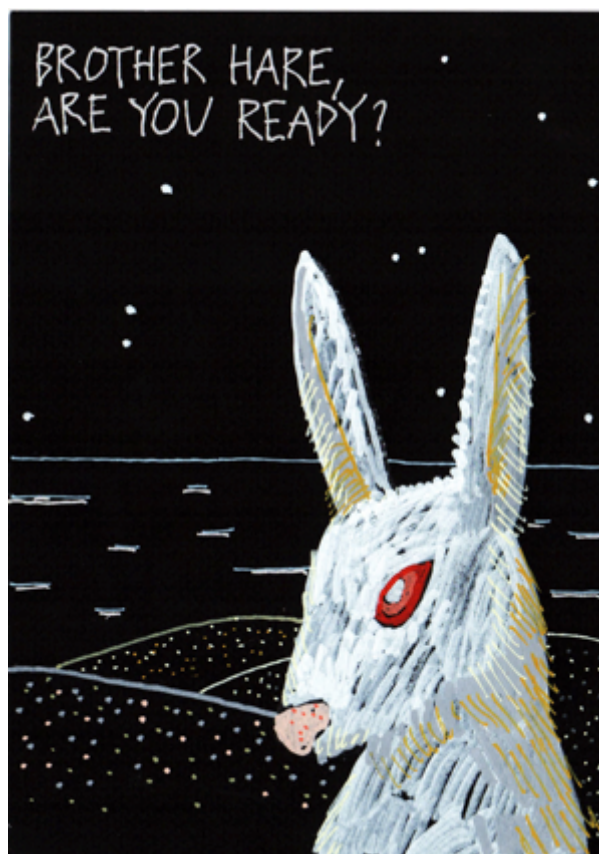
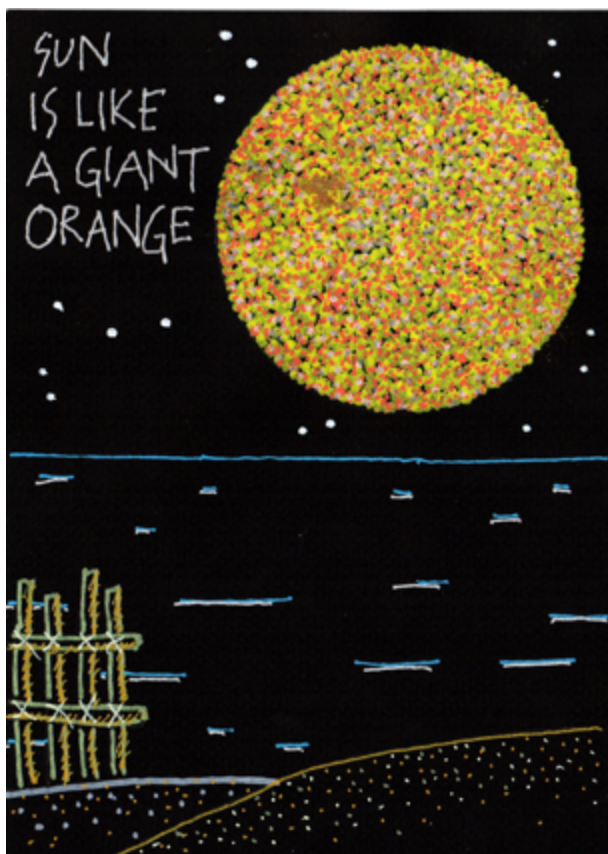
2012～2015年：「Art Support Tohoku-Tokyo」（釜石 塩釜 松島 多賀城）

2010年～現在：「くすかき」（福岡）

作家 HP：<http://blog.igayasu.com>

いずれの催しも、予約不要、入場無料。

場所：千葉大学附属図書館本館/アカデミック・リンク・センター
N棟1階 プレゼンテーションスペース



<資料1>

【ニキータ・アレクセーエフ略歴】 Nikita Alexeev / Н и к и т а А л е к с е е в

1953年、モスクワ生まれ。芸術家と交流の深かった両親の影響で、美術作家ドミートリー・クラスノペフツェフ、オスカル・ラビン、アナトーリー・ズヴェーレフらを早くから知り、1967年にミハイル・ロギンスキーの作品を見て深い影響を受ける。

1964年から76年にかけて、スリコフ記念美術大学付属中学校、1905年記念美術学校、印刷芸術大学等で学んだ。1969年にアンドレイ・モナスティルスキー、ニコライ・パニコフ、レフ・ルビンジュティンらと知り合い、美術、ジョン・ケイジなどの現代音楽、現代詩、禅や仏教をはじめとする東洋文化への関心を共有し、芸術家グループを形成した。1970年代初頭には、イリヤ・カバコフ、イワン・チュイコフらとも交流を重ねた。

1970年代半ばから、モナスティルスキー、パニコフらと共に、ソ連体制下の管理された都市空間を離れて郊外でパフォーマンスを行う〈集団行為〉の活動を展開。70年代末には、ムハモール・グループ、ワジム・ザハーロフ、ユーリー・アリベルトらとも交流している。

1982年から84年にかけてモスクワの自宅のワンルーム・マンションをインスタレーションに変えるグループ展を開催し、それを〈APTART〉(〈Apartment〉と〈Art〉から成る造語)と名づけた。アレクセーエフの〈APTART〉は、ソ連の非公認作家が居住空間でしか作品を展示できないという状況に焦点を当てた政治的メッセージ性を持つもので、〈集団行為〉とは別の方法で都市空間の統制を問題化するアクションだった。

1987年にはフランスに移住。パリでグラフィックの連作やアーティスト・ブックを制作したが、1993年に帰国。ギリシャ、モンテネグロ、イタリアなどのレジデンス先やモスクワで、詩のような断片的なテキストをかきこんだ水彩画、アクリル画の連作を多数制作している。

創作テーマは多岐に渡るが、代表作に、日本の伝承「箒木」に基づいた連作ドローイングがある。ソ連では1960-80年代にかけて日本文化が一大ブームとなり、多くのソ連人が日本への「精神的な亡命(内的亡命)」をソ連の過酷な日常を乗り切る手段としたが、アレクセーエフ氏も日本文化を深く愛し、自伝的著書『記憶の連なり』(モスクワ、新文学展望社、2008年)等にも日本の古典・宗教・文化・伝承についての言及が多数見られる。

2016年に初の来日を果たし、2017年6月には、北アルプス国際芸術祭(長野県大町市)に参加し、千葉大学で日本初の個展を開催する。

*ニキータ・アレクセーエフについての資料は、『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』にも掲載されています。

http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/100390/BA31027730_304_p107_KON.pdf

ニキータ・アレクセーエフは、「北アルプス国際芸術祭～信濃大町 食とアートの廻廊～」(長野県大町市、2017年6月4日～7月30日)にも参加しています。

北アルプス国際芸術祭 サイト <http://shinano-omachi.jp/>

<資料2>

〈岸辺の夜〉展に寄せて ニキータ・アレクセーエフ

これは千葉大学図書館での展覧会のために特別に制作された作品で、5つの要素から構成されている。70 x 3200 cmの巻物、21 x 960 cmの巻物、大きさ30 x 672 cmの「アコーディオン」のような作品、高さ30 cmの12個の「屏風」、高さ21 cmの12個の「屏風」の5つである。それらすべてに、同じ絵とテキストが描かれている。形態(巻物、屏風、屏風を組み合わせた「アコーディオン」のような作品)そのものが、「日本風」(japonnaiserie)である。大学図書館の純ヨーロッパ的な建築を「日本的」空間として使用することは(図書館の本棚は、何か伝統的な床の間のようなものになりつつある)、「東洋」と「西洋」の間の偽りの衝突を執拗に表している。

そのうえ、「岸辺の夜」のテキストは、仏教聖典、日本古典文学、そして宮沢賢治の童話からの明白な、あるいは隠喩的な引用に富んでいる。にもかかわらず、そこには福音書やアレクサンドル・プーシキン、エミリー・ディキンソン、そしてさらにケルト神話やロックンロールの歌の断片を含む、たくさんのもを見つけることができるのだ。

確かに、この作品は図書館のために制作されたのだが、これは奇妙でさえある。なぜそこにはボルヘスやエーコについて何もないのだろうか？なぜなら、それはあまりにも度が過ぎたであろうからである。過度に文学的であるにもかかわらず、「岸辺の夜」は、言葉についてではなく、人生の岸辺に座りながら何かを見る可能性や不可能性についての作品であるからである。

32 mの巻物のうち、実際に広げられるのは、3分の1だけである。10mは完全に広げられるが、それをじっと見るためには、ひざまずいたり、しゃがんだりしなければならないだろう。そしてこれはあまり心地よくない。私たちは寺院にいるわけではないのだろうか？「アコーディオン」は足元に置いてあり、それをじっと見つめることは難しい。そして「屏風」は「床の間」にばらばらの順番で配置されており、もう何の話なのかわからない。

見よ、星が流れ落ちた、願い事をしなさい！ おお、ほらそこ、「よだかの星」が空高く高く燃えている！ 波が静かにささやいている、私たちは夜の岸辺に座っている。



本展覧会についての問い合わせ先、取材の申し込み

鴻野わか菜（人文科学研究院・准教授） メール kono@chiba-u.jp